

7月9日（日）、劇団「青年団」主宰、こまばアゴラ劇場芸術総監督をされている平田オリザさんをお招きして、中高生向け講演会「賢治の祈り-銀河鉄道の夜から幕が上がるへ-」を開催いたしました。

表題の「幕が上がる」は平田さんの著書で、宮澤賢治の作品「銀河鉄道の夜」の劇を女子高生たちが演じることになるというストーリーの（演劇をテーマにした）小説です。

平田さんは劇作家として世界各地で作品を制作されていますが、2010年から2011年にかけて、フランスのパリで「銀河鉄道の夜」を題材にした子ども向けの劇を制作されていたそうで、「幕が上がる」はその演劇制作中のご自身の経験を重ね合わせるようにして書かれたそうです。

今回は中高生に向けた講演会ということで、平田さんご自身が教育の立場に関わった大阪大学CO（コミュニケーション）デザインセンターなどでの経験や、賢治が生きた時代の話を変えながら、現在の中高生たちがこれから直面する大学入試改革や、教育の場における文化・芸術についてお話いただきました。

平田さんが審査員の一人として関わった2013年の全国高等学校演劇大会（※）では、「不条理劇」と呼ばれるジャンルの劇が多く発表されたそうです。これらの劇は、大会の前年2012年に全国の高校生たちが作った作品です。

平田さんによれば、「不条理」とは「人間の生にも、死にも理由がないこと」を表す言葉なのだといいます。使い方の決まって作られた机や椅子と違い、人間にはそこに存在して生きている理由がありません。大会の2年前、2011年には東日本大震災が起こり、多くの人々が家族や知り合いを亡くし心に傷を負いました。震災を経験した高校生たちが、世界が不条理であることを感覚的にとらえたことで、不条理劇を生み出すにいたったのではないかと平田さんは考えているそうです。

話は変わり、入試改革で実施が予定されている新しい試験では、受験生の主体性や協働性などといった、グループ活動で必要となるコミュニケーション能力が問われる問題が出題されるそうです。そのための試験対策として、一部の中学校・高等学校では、演劇を用いた授業を行っているところもあり、平田さんは教師の立場としてそれらに関わっているのだそうです。

こうしたグループ活動の場で重要になるのが、センスやマナーなどの身体的文化資本と呼ばれる感覚だと言われているそうです。これは、小さい子どものうちから優れた芸術や文化に触れることで形成されていくのだそうですが、文化に触れる機会の得やすさには地方と都市とで大きな隔たりがあります。

文化や教育を始めとした地方と都市との地域間格差を埋めることに成功しているのは、自分たちのセンスを信じて主体的に村おこしに取り組み、地域のオリジナリティを出せた自治体だけだといいます。単に地域にある特産物や風景を売り出すだけではなく、地域の人々の工夫によって付加価値を生み出すこと、そして付加価値を生み出せる人材を育成していくことが大切なのだと平田さんはおっしゃっていました。

そしてまとめとして、「誰人もみな芸術家たる感受をなせ 個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ」（農民芸術概論綱要）から始まる宮澤賢治の言葉を引用しながら、不条理な人間の生を受け止めて、それでもなお生きていくために賢治が芸術や文化を重要視していたということを説明していただきました。

専門的な内容も含まれていましたが、平田さんのユーモアに溢れる話しぶりや、分かりやすくまとめあげられた説明に、中高生から大人まで皆が話に引き込まれ真剣に耳を傾けている様子でした。アンケートでは、「今まで以上に文学や演劇について関心を持てた」「この講演会に参加できた中高生は良かったと思う」という感想をいただきました。

図書館職員としても、文化や教育に関わる施設である図書館のあり方を考えさせられるような内容でした。今回お話いただいた内容は、「下り坂をそろそろと下る」を始めとした平田さんの著書でも語られています。平田さんの著書は世田谷区の図書館にも多く所蔵がありますので、ぜひ読んでみてくださいね。

※全国高等学校演劇大会では、前年に予選を勝ち抜いた学校のみが翌年の全国大会に出場できるという流れになっています。